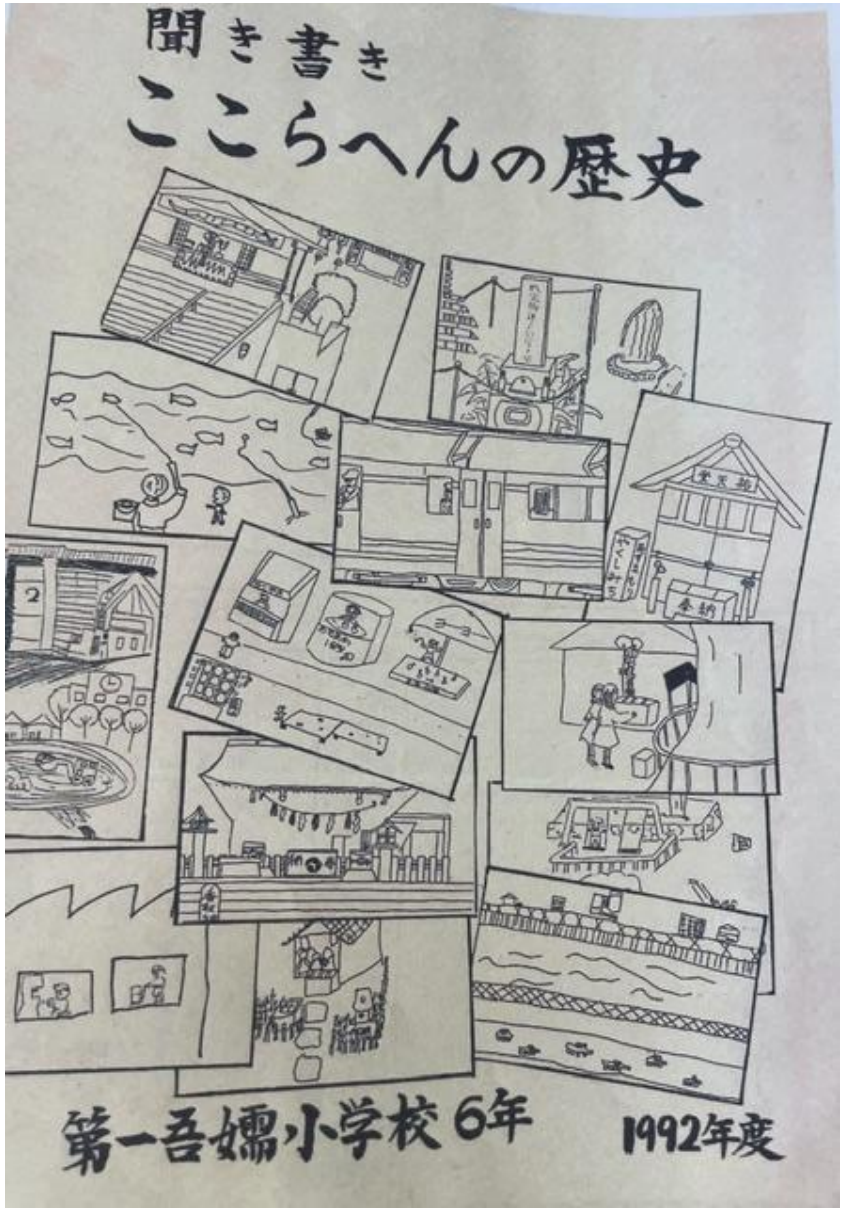
聞き書き

こころへんの歴史



第一吾嬬小学校6年　1992年度

一九九二年度調査・令和版編集

はじめに

本書は、一九九二年度に第一吾嬬小学校六年生が取り組んだ地域学習「ここらへんの歴史」をもとに編集した復刻版である。

子どもたちは一年間にわたり、立花・文花・小村井地域を歩き、地域の人々から話を聞き、古い地図や資料を調べ、地域の歴史を記録した。

本書には、地域の神社や寺院、川や鉄道、工場、商店街、戦争の記憶などが記録されている。それは単なる歴史ではなく、この地域に暮らしてきた人々の人生そのものの記録である。

今回、復刻公開にあたり、個人名の公開は控えさせていただいた。実は、その証言の中には貴重な記録がたくさん残されている。全編の公開は、校内での閲覧のみとさせていただくこととしたい。

目次

第一部　この地域の成り立ち

第一章　一吾嬬小・団地の場所、むかしは

第二章　昔のこのあたり

第三章　立花公園の歴史

第四章　香取神社

第五章　吾嬬神社

第二部　川と道と人々のくらし

第六章　平井街道の歴史

第七章　平井街道の縁日

第八章　セイフー横のお堂

第九章　北十間川の歴史

第十章　東武亀戸線のむかし

第十一章　祐天堂

第三部　戦争と工場の記憶

第十二章　明源寺鉄かぶとの碑

第十三章　この地域の工場の歴史

第一部　この地域の成り立ち

第一章　一吾嬬小・団地の場所のむかし

現在の第一吾嬬小学校や立花団地の周辺は、多くの人々が暮らす住宅地となっている。商店街もあり、学校には毎日子どもたちの元気な声が響いている。しかし、この場所は昔から同じ姿だったわけではない。

一九九二年度の第一吾嬬小学校六年生は、「団地や学校ができる前、この場所には何があったのだろう」という疑問をもち、地域に長く住んでいる人々への聞き取り調査を始めた。児童たちは学校の近くの商店を訪ねたり、古くから住む方々の家を訪問したりしながら、この土地の歴史をたどっていった。

最初に話を聞いた文房具店のMさんは、この地域に大きな工場があったことを教えてくれた。その工場は「東京モスリン工場」と呼ばれていた。モスリンとは布地の一種であり、工場では織物や衣類の材料となる布が作られていたという。現在の立花団地から第一吾嬬小学校周辺にかけて広大な敷地を持ち、多くの人々が働いていた。なかでも若い女性が数多く働いていたことを覚えている人が多かった。

さらに調査を進めると、東京モスリン工場は戦争が始まると軍需工場へと変わったことが分かった。工場では戦争に関係する物資が作られるようになり、地域の様子も大きく変化していった。そして昭和二十年三月の東京大空襲によって工場は大きな被害を受けたという。

戦後、この工場跡地には建設省東京技術事務所が置かれた。Gさんは、当時の建設省では建設機械の整備や修理、道路や河川に関する技術研究、水質検査や土木材料の試験などを行っていたと話してくれた。広い敷地にはブルドーザーやパワーショベルなどの大型機械が並び、多くの職員が働いていたという。

だが、子どもたちが特に興味をもったのは、その時代の遊び場の話だった。布団店のKBさんは、建設省の敷地の周辺には広い原っぱがあり、そこにはトンボやチョウがたくさん飛んでいたと話してくれた。地域の子どもたちは虫取りをしたり走り回ったりして遊んでいたそうである。今では高い建物が建ち並ぶ地域だが、当時は青空の下で自由に遊べる空間が広がっていた。

さらに現在の東あずま駅の周辺には蓮田が広がり、田んぼもたくさんあったと語った。夏になるとホタルが飛び、魚が泳ぎ、子どもたちは自然に囲まれて暮らしていたという。

また、北十間川は今よりずっと水がきれいで、魚釣りや水遊びが楽しめたそうである。現在の住宅街や道路からは想像できない風景だが、つい数十年前までこの地域には豊かな自然が残されていたのである。

児童たちは調査を通して、この土地が「農村」「工場地帯」「建設省施設」「団地と住宅地」という大きな変化をたどってきたことを学んだ。毎日通う学校や暮らしている団地も、長い歴史の流れの上に成り立っているのである。

第二章　昔のこのあたり

現在の立花・文花・小村井の地域には住宅や商店が建ち並び、多くの人々が暮らしている。しかし、地域の古老たちの話を聞くと、そこには今とはまったく異なる風景が広がっていたことが分かる。

子どもたちは、地域の昔の様子を知るために、多くの人から聞き取りを行った。

地域で工場を営む方が、おじいさんから聞いた話として、江戸時代には鶴や鴨がたくさん飛んでいたと教えてくれた。また明治時代には草原が広がり、タヌキやキツネも見られたという。現在の市街地からは想像できない自然豊かな環境だったことがうかがえる。また別の方は、このあたりがかつて「あずま村」と呼ばれていたことを教えてくれた。

その由来について児童たちはさらに調べたところ、当時は「東村」とする案もあったが、有名な吾嬬神社があったため「吾嬬村」となったという説明にたどり着いた。地域の名前そのものが、神社と深く結びついていたのである。

また、ある方は大正時代から昭和初期にかけての風景を語ってくれた。

現在の明治通りは当時まだ細い道で、周囲には蓮田や田んぼが広がっていた。福神橋の付近にはフナが泳ぎ、湿地にはレンゲやタンポポが咲いていたという。春には花が咲き乱れ、四季の変化を身近に感じることができた。

さらに昭和初期には大雨が降ると地域のあちこちで水があふれた。

また、別の方の証言では、道路脇のドブ川があふれ、子どもたちはその水にイカダを浮かべて遊んでいたと証言している。現在の都市的な景観からは想像しにくいが、この地域は水とともに暮らしていたのである。

商店街の様子も今とは違っていた。Tさんによると、平井街道沿いにはたくさんの商店が並び、映画館まで存在していた。人々は買い物や娯楽のために集まり、街は活気にあふれていたという。

こうした聞き取りから見えてくるのは、「昭和の町」の姿だけではない。

さらにその前には田畑や湿地が広がる農村があり、自然の中で人々が暮らしていた。そしてそこへ工場ができ、人が集まり、商店街が生まれ、現在の住宅地へと変わっていったのである。

児童たちは、多くの人の記憶を通して、この地域がたどってきた長い時間の流れを知ることができた。

第三章　立花公園の歴史

現在の立花公園は、子どもたちが遊び、大人たちが散歩を楽しむ身近な公園である。しかし、六年生の子どもたちが調べてみると、この場所にはかつて大きな工場があり、現在とはまったく異なる景色が広がっていたことがわかった。

調査は、まず古い地図を調べることから始まった。昭和七年の地図には、立花公園の場所に「東京モスリン工場」と記されていた。そこで子どもたちは、この工場について地域の人々に聞き取りを行った。

しかし、話を聞けば聞くほど不思議なことが起こった。ある人は「東京モスリンは立花公園の場所にあった」と言い、別の人は「文花の方にあった」と話すのである。そこで児童たちはさらに古い地図や資料を調べた。その結果、時代によって工場の名前が変わり、また複数の工場が存在したため、人によって記憶が異なっていたことが分かった。

明治時代には「キャリコ製織会社」、その後は「東京モスリン亀戸工場」「東京モスリン吾嬬工場」と呼ばれ、戦後には東洋紡績などへと変化していった。長い歴史のなかで工場の名前や所有者が変わりながら、この地域の産業を支えていたのである。

そのモスリン工場で働いていた方の一人が様子を語ってくれた。工場では多くの若い女性が働き、東北地方などから来た女工もいたという。工場の講堂では、お寺の住職による法話やお経が行われることもあり、働く人々の生活を支える場にもなっていた。

また、当時の地域には映画館もあった。その方によれば、「吾嬬館」「明星館」「橘館」などの活動写真館があり、人々の娯楽の中心となっていた。現在では映画館の姿はないが、かつては多くの人々が映画を楽しみに集まっていたのである。

さらに児童たちは「北の橋」と呼ばれる橋の存在を知った。現在は見ることができないが、北十間川には木造の橋が架けられ、人々の往来を支えていた。ところが昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼失してしまったという。地域の人々の記憶の中には、橋の姿が今も残されていた。

現在、立花公園には工場も映画館も橋もない。しかし、その場所には多くの人々が働き、暮らし、楽しみ、行き交った歴史が刻まれている。児童たちは、公園という身近な場所にも長い歴史が眠っていることを知ったのである。

第四章　香取神社

小村井の香取神社は、地域の人々にとってもっとも身近な神社の一つである。初詣や祭礼で訪れたことのある人も多いだろう。しかし子どもたちは、「なぜ香取神社がここにあるのか」「なぜ近くに亀戸の香取神社もあるのか」という疑問を持った。そこで神主や地域の人々に話を聞き、その歴史を調べることにした。

最初に分かったのは、小村井の香取神社と亀戸の香取神社は、どちらも千葉県香取市の香取神宮と関係があるということだった。祭られている神様は経津主大神で、農業、海上安全、縁結び、安産などを守る神様として信仰されている。剣の神としても知られ、武道や勝負事の守護神でもある。

小村井香取神社の由来として伝えられているのが、「六軒」の話である。平安時代の終わり頃、小山、金子、鹿倉、吉野、川島、町田の六軒の家が新しい土地を求めてこの地に移り住んだ。そして故郷で信仰していた香取神社をこの地にも祀ったという。開拓者たちは新しい土地での豊作と家族の安全を願って神社を建てたのである。

また境内には六つの小さな神社があることにも気づいた。水神社、天祖神社、三峯神社、諏訪神社など、さまざまな神様が祀られている。それぞれが農業、水、防火、病気平癒など異なる御利益を持ち、人々は暮らしの願いに応じて神様を大切にしてきた。

子どもたちが特に驚いたのは「力石」の存在だった。境内には二百キログラムを超える大きな石が残されている。昔の若者たちはこの石を持ち上げて力を競ったという。今では考えられない重さだが、農作業で鍛えられた当時の若者たちは、それを誇りとしていたのである。

香取神社では今でも様々な行事が行われている。その中でも「獅子巡行」は特に大きな行事で、獅子頭を持って地域を巡り歩く。昔は悪病や災厄を払う意味があり、現在でも伝統行事として受け継がれている。

さらに調査の中で、小村井梅園という存在も明らかになった。江戸時代には将軍が立ち寄ることもあったという名所で、多くの梅の木が植えられていた。残念ながら明治四十三年の水害で失われたが、その記憶は今も地域に残っている。

香取神社の歴史を調べることで、児童たちは地域の始まりそのものに触れることができた。神社は単なる宗教施設ではなく、この土地に生きてきた人々の願いや歴史を伝える大切な存在だったのである。

第五章　吾嬬神社

北十間川沿いにある吾嬬神社は、この地域の地名や学校名のもとになった神社である。しかし、その由来を知る人は意外に少ない。子どもたちは、この神社がいつ、どのように作られたのかを調べた。

調査のなかで最も多く語られたのは、日本武尊と弟橘姫命の伝説だった。

伝説によると、日本武尊が東国へ向かう途中、海が荒れて船が進めなくなった。そこで妻である弟橘姫命が自ら海へ身を投じ、荒れた海を鎮めたという。そして姫の持ち物が流れ着いた場所に神社が建てられたと伝えられている。

しかし、児童たちはここで単に伝説を紹介して終わらなかった。担任の先生は「神話と歴史の違い」について説明した。神話は史実そのものではないが、昔の人々の考えや願いが込められている。大切なのは、伝説をそのまま事実とするのではなく、なぜそのような話が語り継がれてきたのかを考えることだと学んだ。

神社にはかつて二本の大きなクスノキがあったという。一本は男木、もう一本は女木と呼ばれ、人々に親しまれていた。葉を煎じると病気に効くと信じられ、多くの人がお参りに訪れたそうである。現在は枯れてしまったが、お賽銭箱にはその木材が使われたと伝えられている。

また吾嬬神社には胞衣塚（えなづか）と呼ばれる場所も存在した。皇族ゆかりのへその緒が納められていたという伝承があり、この地域の人々が神社を特別な場所として大切にしてきたことが分かる。

祭礼についても調査が行われた。現在行われている祭りのほかに、「箸感謝祭」という珍しい行事もあった。使い終わった箸に感謝し、お焚き上げを行う祭りで、物を大切にする日本人の心が表れている。

そして、児童たちは最後に気づいた。

吾嬬神社の名前は、吾嬬村、吾嬬小学校、東あずま駅など、地域のあちこちに残されている。つまりこの神社は単なる一つの神社ではなく、地域そのものの象徴なのである。

神社の歴史を調べることは、この地域の歴史そのものを調べることだったのである。

第二部　川と道と人々のくらし

第六章　平井街道の歴史

現在、第一吾嬬小学校の前を通る道は「平井街道」と呼ばれている。車が行き交い、人々が行き来する何気ない道路だが、子どもたちは「なぜ平井街道と呼ばれるのだろう」と疑問を持った。そこで地域の人々を訪ね、この道の歴史を調べることになった。

聞き取りを進めると、多くの人が「昔は馬車が通っていた」「人力車も走っていた」と語った。また、昭和三十年ごろまではバスも通っていたという。現在の道路幅からは想像しにくいが、この道は地域の重要な交通路だったのである。

さらに調査を進めると、平井街道は単なる生活道路ではなかったことが分かった。ある方は、この道を昔「聖天道」と呼んでいたと教えてくれた。平井聖天へ参詣する人々が通った道であり、そのために多くの人が行き交っていたのである。

子どもたちは実際に平井聖天まで歩いてみた。現在は橋を渡れば簡単に行くことができるが、昔は平井橋がなく、中川を渡し船で渡らなければならなかった。参詣客は船で川を渡り、その後平井街道を通って吾嬬方面へ向かったのである。

江戸時代から続く参詣の道は、地域の発展とともに商店街となり、人々の暮らしを支える道となった。そして現在も「平井街道」という名前だけが、かつての歴史を伝えている。

第七章　平井街道の縁日

平井街道には、かつてとても賑やかな縁日があった。今ではたこ焼き屋が一軒出る程度だが、地域の人々に話を聞くと、昔は道路の両側いっぱいに屋台が並び、祭りのような賑わいだったという。

子どもたちは、縁日がいつ行われていたのかを調べた。その結果、一日・十日・二十日に行われる縁日と、六日・十六日・二十六日に行われる縁日の二種類があったことが分かった。

一日・十日・二十日の縁日は草分稲荷の縁日であった。

渡辺酒店の脇にある小さな稲荷を中心に行われ、地域の商店街の発展を願って始められたという。屋台には本屋、瀬戸物屋、綿菓子屋、ヨーヨー屋などが並び、子どもたちの楽しみの場になっていた。

一方、六日・十六日・二十六日の縁日は庚申様の縁日だった。

こちらは町の発展と無病息災を願って始められたもので、庚申信仰と深く結びついていた。戦前から続く行事だったが、交通量が増えたことなどから次第に行われなくなった。

地域の人々の証言からは、縁日が単なる買い物の場ではなく、人と人を結びつける交流の場であったことが伝わってくる。

第八章　セイフー（現ダイエー）横のお堂

立花団地近くのスーパー「セイフー」の横には、小さなお堂がある。

子どもたちは毎日のように前を通っていたが、それが何なのかを知らなかった。そこで調査を始めると、このお堂が庚申堂であることが分かった。

長年管理してきた方によると、このお堂はかつて別の場所にあり、地域の人々によって守られてきたという。戦争で焼けたこともあり、現在の場所へ移された。

さらに児童たちは庚申信仰とは何かを調べた。

庚申信仰は中国から伝わった民間信仰で、人の体の中にいる「三尸（さんし）」という虫が悪事を天に報告すると考えられていた。そのため庚申の日には眠らずに過ごし、災いを避けようとしたのである。

お堂のそばにある「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿も、この庚申信仰と深く関係していた。子どもたちは柴又帝釈天や区内の庚申塔まで調べに行き、地域の信仰文化の広がりを知ったのである。

第九章　北十間川の歴史

今の北十間川を見て、「泳げる川だった」と聞いて信じられる人は少ないかもしれない。

しかし地域の古老たちは口をそろえて「昔はきれいだった」と話した。子どもたちはその言葉に驚きながら調査を進めた。

何人の方は、子どものころ実際に泳いだと証言している。魚釣りもでき、川は人々の遊び場だったのである。

また北十間川には「北の橋」が架かっていた。木造の橋で、戦争中の空襲によって焼失したという。この橋は地域の大切な交通路だった。さらに川には船宿もあり、多くの運搬船が出入りしていた。船に住みながら仕事をする家族もいたという。花王石鹸工場などへ原料を運搬する船も利用されており、北十間川は地域産業を支える重要な役割を果たしていた。

川は遊び場であり、交通路であり、生活の場でもあったのである。

第十章　東武亀戸線のむかし

現在の東武亀戸線は地域の身近な交通機関である。

しかし、その始まりは貨物輸送だったという。子どもたちはこの事実に驚きながら調査を始めた。

当時を覚えている方によると、当初は人を乗せず貨物列車だけが走っていた。貨物列車は野菜や魚、木材を運び、地域の物流を支えていた。

昭和三年になると人を乗せるようになり、沿線の発展が進んだ。人々は列車の通過時刻を時計代わりに利用するほどだったという。

この話からは、貨物駅や引込線の存在も明らかになった。鉄道は地域産業と深く結びついていたのである。

第十一章　祐天堂

境橋のたもとに小さなお堂がある。名前は「祐天堂」という。

普段はあまり目立たないが、地域にはさまざまな言い伝えが残されていた。

その一つは、祐天上人にまつわる話である。目黒の祐天寺に眠る祐天上人が、この地で水難事故に遭った人々を供養したという伝承が残されている。別の話では、川に落ちた子どもを助けたことが祐天堂の始まりになったとも伝えられている。

子どもたちは実際に祐天寺を訪れ、祐天上人の生涯について調べた。その結果、祐天堂が地域の安全や供養の願いと結びついていることを知った。

また、祐天堂の横には薬師道や吾嬬の森を示す古い道標も残されていた。

小さなお堂の周りには、かつての街道や人々の暮らしの記憶が今も息づいているのである。

第三部　戦争と工場の記憶

第十二章　明源寺鉄かぶとの碑

明源寺の境内に入ると、二つの石碑が目に入る。

一つは戦死した兵士たちを慰霊する「戦死将兵忠霊塔」。

もう一つは東京大空襲などで亡くなった人々を供養する「戦災殉難者慰霊塔」である。

六年生の子どもたちは、この碑がなぜ建てられたのかを知りたいと思った。そして、この地域で戦争を体験した人々から話を聞き始めた。すると、その話は単なる歴史ではなく、人々の人生そのものだった。

東京大空襲の夜

ある方は、戦時中、青年将校として軍務に就いていた。

三月十日の東京大空襲の時、ご自身は立川航空廠にいたため大きな被害には遭わなかった。しかし、戦後に戻ってきた地域は大きく変わっていたという。

地域に住んでいた人々は、あの夜を今も忘れていなかった。

花王石鹸付近に住んでいた女性は、空襲が始まると近所の人たちと防空壕に避難した。ところが、焼夷弾によって街は次々と燃え始めた。

花王石鹸の油の施設には火が燃え移り、大きな炎を上げた。吾嬬神社の木々も燃え上がり、周囲はまるで火の海になったという。人々は防空壕から飛び出し、燃えていない場所を求めて逃げた。

しかし、どこへ逃げても火が追いかけてくる。東あずま公園付近の原っぱには避難する人々が集まっていたが、そこも安全とは言えなかった。

この方は、「荷物に火が移ったらみんな死んでしまう」と思い、自宅へ戻った。家には、瓦の破片と防空壕しか残っていなかったという。

防空頭巾に耳がくっついた

今回の聞き取りの中でも、とりわけ衝撃的な証言がある。その証言である。この方は、空襲直前まで疎開していたが、子どもの病気のため東京に戻っていた。そして昭和二十年三月十日の未明、空襲に遭遇する。家族は防空壕へ避難した。

しかし焼夷弾の攻撃は続き、周囲は燃え広がっていった。

母親は「ここにいては危ない」と判断し、外へ出た。人々は燃え盛る街の中を逃げ続けた。
やがて平井方面へ向かう途中、川にかかる水道管のような構造物を渡ろうとした。
ところが途中で足を踏み外し、ご本人も母親も川へ落ちてしまった。幸い船によって救助されたが、その時には母親はすでに大やけどを負っていた。
ご本人は、その時のことをこう語っている。
「母の防空頭巾を取ったら、耳が一緒についてきました。」
火傷のため、耳が防空頭巾に張り付いてしまっていたのである。
母親は病院へ運ばれたが、十日後に肺炎で亡くなった。
ご本人は、「私はショックでした」と語っている。
この一言には、子ども時代に経験した深い悲しみが込められている。

焼け野原になった町

またある方は、最初は第一吾嬬小学校へ避難したという。ところが学校も危険になり、小村井方面へ逃げ、さらに第四吾嬬小学校へ移動した。
別の方も、空襲後の光景を語っている。そこには焼死体や水死体が数多くあった。
戦後の食糧不足は深刻で、人々は死んだ馬の肉を食べたり、ぬかやブドウ糖を口にしたりして生き延びたという。
今日の豊かな暮らしからは想像できないような厳しい生活だった。

卒業式のできなかった子どもたち

戦争は子どもたちの学校生活にも大きな影響を与えた。その方は、一九四五年春に卒業するはずだった児童の一人である。
当時、児童たちは筑波山方面（正しくは茨城県大子町）へ集団疎開していた。三月三日に卒業式を行うため東京へ戻って来たが、その直後に東京大空襲が起きた。
東あずま公園周辺の防空壕に避難したこと。夜空を埋め尽くす焼夷弾を見たこと。街が燃え続けていたこと。そして学校も町も失われてしまったこと。そうした記憶が語られている。

原公園の慰霊碑

子どもたちは調査を進める中で、原公園にも慰霊碑があることを知った。
ある方の証言によれば、東京大空襲によって亡くなり、身元が分からなかった人々の遺骨が埋葬されているという。
毎年三月十日と七月四日には供養が行われている。省了寺の住職も、平成になってからも遺骨が発見されたことがあると話している。
つまり、東京大空襲は過去の出来事ではなく、今も地域の地下や人々の記憶の中に残り続けているのである。

子どもたちが受け取ったもの

六年生の子どもたちは、最初は明源寺の碑について調べるつもりだった。しかし調査を進めるうちに、石碑そのものよりも、その碑の向こうにある人々の記憶と出会うことになった。

燃える町。逃げ惑う人々。家族との別れ。疎開生活。戦後の飢え。

それらは教科書の中の出来事ではなく、この地域で実際に起こった出来事だったのである。明源寺の碑は、そうした人々の記憶を忘れないために建てられている。

そして、一九九二年の子どもたちが聞き取ったこれらの証言は、今では地域に残された大切な歴史資料になっているのである。

第十三章　この地域の工場の歴史

現在の立花・文花・小村井地域を歩くと、住宅やマンションが多く見られる。しかし少し裏通りに入ると、今でも小さな工場が点在している。この地域は長い間、「ものづくりのまち」として発展してきた土地なのである。六年生の子どもたちは、その歴史を知るために地域の工場を訪ね、多くの職人や工場主から話を聞いた。

工場の多いまち

子どもたちがまず尋ねたのは、Kさんだった。

Kさんによれば、昭和の初めごろ、この地域にはハンドバッグやがま口の口金を作る工場が数多くあったという。現在でもわずかに残っているが、昔と比べるとその数は大きく減った。チャックを使ったバッグが普及したことで、口金の需要が少なくなったからだという。

また当時は、おもちゃ工場もたくさんあった。今のようなプラスチック製ではなく、ブリキ製のおもちゃが主流だった。職人たちは「けっとばし」と呼ばれるプレス機を足で操作しながら、おもちゃの部品を作っていたという。子どもたちは、現代の工場との違いに驚いた。

人口の増加と工業の発展

Kさんは、工場の発展と人口の増加には深い関係があることも教えてくれた。

児童たちは図書館で人口統計を調べた。その結果、明治から大正、昭和にかけて向島地区の人口が急激に増えていたことが分かった。工場が増えると働く人が集まり、人が増えると商店ができる。その結果として町が発展していったのである。

Kさんは、「戦争のために必要な物を作るため、工場が増え、人が集まった。戦後も工場を再開するために人が集まった」と話していた。

この地域の発展は、工業の発展とともに歩んできたと言ってよいだろう。

K鋳工所の歩み

Kさんの工場は大正七年に創業した。創業者はkさんのお父様で、新潟県から上京して工場を始めたという。初期にはねじ回しなどの工具を製造していた。

しかし戦争が始まると工場の仕事は一変した。飛行機の部品や鉄かぶとなど、軍需品の製造が中心になったのである。ところが昭和二十年三月の東京大空襲で工場は全焼してしまう。

それでも人々はあきらめなかった。戦後の昭和二十一年に工場を再建し、現在につながる仕事を続けてきた。現在は建物の金具や船舶部品などを製造している。

工場の中には鋳物を溶かす溶解炉やフライス盤、ボール盤などさまざまな機械が並び、ものづくりの現場が今も息づいている。

錠前を作る工場

Sさんの工場では、錠前や鍵を製造している。

その歴史は明治四十年までさかのぼる。戦争中は飛行機や戦車に関係する部品の製造に協力したが、戦後は再び鍵づくりに戻った。

当時の工場には二十人ほどの従業員がいた。しかし戦争が終わると戦死した人も多く、働く人は大きく減ってしまったという。

現在では自動化が進み、仕事の内容も変わった。それでも長年培われた職人の技術は受け継がれている。

がま口からハンドバッグへ

KAさんの工場は、大正十年から続いている。戦前はがま口を中心に作っていたが、戦後はハンドバッグの金具製造へ移行した。戦争中には無線機のケースまで作っていたという。

KAさんは、現在の工場が抱える最大の問題として人手不足を挙げている。

油で汚れたり細かな作業をしたりする工場の仕事を希望する若者が減り、後継者不足が大きな課題になっているのである。

それでも夫婦二人で仕事を続け、長年の技術を守っている姿は、地域の町工場を象徴しているようだった。

メッキ工場の仕事

KYさんはメッキ工場を経営している。工場ではハンドバッグの部品やアクセサリー、ベルトのバックルなどに金属メッキを施している。材料には真鍮やダイキャストが使われる。

子どもたちは工場見学もさせてもらった。工場内には独特のにおいが漂い、多くのタンクや機械が並んでいた。金属を洗浄し、銅メッキ、ニッケルメッキ、金メッキと工程を重ねることで、美しい製品が完成する。

同じように見える部品でも種類は数え切れないほどあり、一日に何千個、時には一万個以上を加工することもあるそうだ。

家族で続ける町工場

Y製作所もまた、この地域らしい工場である。Yさんは昭和二十六年から仕事を続けてきた。工場では看板部品や陳列台などを製造している。大規模工場ではなく、家族とともに営む小さな町工場である。

仕事ではシャーリングやボール盤、スポット溶接機などを使う。問題はやはり騒音だという。住宅地の中にある工場では、ものづくりと住環境の両立が大切になる。

町工場が支えた地域

調査を終えた子どもたちは、この地域が工場によって発展してきたことを理解した。かつて東京モスリンのような大工場があり、その周囲に多くの町工場が生まれた。工場には職人が集まり、家族が暮らし、商店ができ、町が形成されていった。

戦争によって多くの工場は被害を受けた。しかし戦後、人々は再び工場を建て直し、地域を復興させた。

現在、工場の数は減りつつある。それでもこの地域には、金属加工やメッキ、金具製造などの技術が今も残り続けている。

子どもたちは工場を見学し、職人たちの話を聞く中で、普段何気なく暮らしている町が、多くの人々の働きによって支えられてきたことを知ったのである。

復刻編集後記

本書は、一九九二年度第一吾嬬小学校六年生による地域学習「ここらへんの歴史」をもとに再編集したものである。

本書に収録された証言は、地域の神社や寺院、川や鉄道、工場の歴史のみならず、この地域で暮らした人々の記憶そのものである。

とりわけ東京大空襲を体験した方々の証言は、年月の経過とともに失われつつある歴史の記録として極めて貴重である。

ここに記されているのは、遠い昔の歴史ではない。今からわずか数十年前まで、この地域で実際に暮らしていた人々の記憶である。

立花団地が建つ前の風景を知る人。東京モスリン工場で働く人々を見た人。平井街道の縁日で遊んだ人。北十間川で泳ぎ、魚を釣った人。そして、東京大空襲の炎の中を逃げのびた人。そうした人々の声が、本書には残されている。

当時の第一吾嬬小学校六年生は、自分たちの暮らす町を知ろうとして地域を歩き、多くの人に話を聞いた。おそらく当時の子どもたちは、自分たちの記録が三十年後、四十年後にも読まれることを想像していなかっただろう。しかし、その誠実な聞き取りの積み重ねが、現在では地域の歴史を知るかけがえのない資料となっている。

歴史は出来事だけでできているのではない。そこに生きた人々の記憶によって受け継がれていくものである。本書が、立花・文花・小村井地域の歴史を学び、語り継ぎ、未来へ伝えていくための一助となることを願ってやまない。

立花吾嬬の森小学校長　向井一郎」